

幾度、生まれを呪ったか。辛酸を嘗め、煮え湯を飲まされ、大切なものを無くし、恐れ、泣くことすら許されず…。

…でもわかったの♡それは全部私が弱かったせい…だから、ああ、もっと早くこうしておけば良かった。

「要らない。塔へ送りなさい」

低い声を出しながら、扇子越しに口角が上がる。やってやった。

「しかし…ベアトリーチェ陛下！あの方は母が違うとは言え、血の繋がった実の兄上様で…！」

「…軽々しく妾の名を呼ぶでない」

怒りのあまり怒鳴ってしまうかと思った。全身すっぽりローブで隠した埃臭い男、アーティーは、私の乳兄弟だからと自惚れて、最近何かと楯突いてくる。

「証拠は揃っている。亡き父王への侮辱、妾の母に毒を盛ったこと、妾の幼き妹を殺したこと。充分でなくて？殺さないだけ温情を与えたと思いなさい」

静まり返った法廷を、静かに去っていった。侍女が周りにはいるが、構いなく笑いを洩らす。彼女らの家族は私がしっかりと『把握』しているから。…だから、裏切らないんだもの♡

目の先の角から、体躯の良い中年の男が顔を出したから、うげ、っと思わず顔を顰めそうになってしまった。慌てて口を引き結び、笑う。国軍を取りまとめる彼、我が国の将軍には媚びておかないといけない。私のこの絶対的な力は、悔しいがこの男を無しに成り立たない。

「…リーチェ、11時に」

右耳に囁かれて、私は目を伏せ控えめに笑った。

「…お待ちしております」

だから、しょうが無い。しょうが無い。

「あっ、あっ、ん、ん～ッ！しょうぐんっ、あっ、すきっすきっ」

耳元で男の低く唸る声がある。踏ん張って布が擦れる音、私のなかに異物が入り出す下品な音。私にはまだ生えていない陰毛がちくちくと秘部をくすぐって、こんなお父様と同じくらいの年齢の男と、なにしているんだろう、私、って思う。ぱち、ぱち、って、リズムに全身揺さぶられて、暴力的に犯される。これは、作業。将軍が早く達するよう甘く媚びるが、実のところ不快感しか無い。葉巻の香りが彼自身に染みついて、それが私に移るのをぼんやり感じていた。

天蓋を見つめる。将軍が去って、私は裸でぼんやりと仰向けでいた。果物や花や蔓の刺繍、意匠を凝らしたドレープ、フリル、レース…子どものときは、こんなベッドで眠れるとは思わなかった。姫と言っても、私は後ろ盾の無い側室の娘だった。その美しさゆえに王に見染められた母は、私と妹を身籠るが、盛られた毒によって唯一の武器である美貌を失い、王に飽きられた。ずっと…この王宮で、ネズミみたいに息を潜めて生きていた、私たちは。もう、母も妹も死んで、ネズミじゃなくなったのに、ここには私しかいない。どうでもいいけれど、足の間が引き攣って痛い。

「陛下、魔導師さまがお会いしたいと」

衛兵の声。…アーティー。またか。小さい頃は慰めてもらったり甘えたりしたけど、今は、まあ、どうでもいい。昔の情と、国に有益なその魔術の実力ゆえに無礼を許してあげているのに、本当にうるさい。女王としての威厳を保つためには、アーティの様な反抗的な、しかも馴れ馴れしい輩は邪魔でしかない。面倒くさい。嫌いってわけじゃないから、大人しくしてくれれば、私なんにも彼に望まないのに。

「いいわ、入れて」

別にアーティーに裸を見られた所で、困る事も無い。いつまでたってもなよなよして男らしさの欠片も無い。そもそも最近顔も見えていない。ローブを深く被って、研究室に引きこもりがちだもの。あくびをしている間にアーティーは入ってきた。なに、と開きかけた私の口を、生意気にも遮る。

「リーチェ！きみ…本当にあの男と…関係を持つてるの！」

ゆったりと上体を起こし…なにか悪いの？はじめて聞いたアーティーの怒声にそう返すと、彼は言葉をつまらせ、声にならない抗議をしたみたいだった。髪をかきあげて伸びをする。

「軽々しく呼ばないと再三言っているでしょう。誰と寝たってあなたには関係無いじゃない」

「関係無いだって！」

びっくりして思わず彼を見る。聞いたことのない、低くてビリビリした叫びだった。ふう、ふうと胸で息をして、どうにか怒りを抑え込んでいる様子で、私はすこし心臓が硬直してしまった。

「きみ、これで良いと思ってるの？」

震えた声だった。グツグツ煮えたぎる鍋を、無理やり蓋で閉じたような。防衛本能からか、口だけがぺらぺらと動き出す。そうだ、歯向かう者がいるなら、私の強さを見せ付けなければいいの。

「良いに決まってるじゃない、あ、あなたが、あなたが安心して生きられるのも私のおかげよ？私が将軍と関係を持つこと、で…」

二の句が継げなくなってしまった。ツカヅカとベッドに近づいてきたアーティーの体は、肩も手も足も力が入りきって、暗いフードの隙間の目だけが、キラキラと私を睨んでいた。

「そう、きみは僕のためにアレに抱かれたというの」

「な、にが悪いの…」

…怖い。気がつけば指先が震えていたから、音を立てずシーツの下に隠した。ひっそりと手を握りしめる。

「殺してやる」

ひ、と喉がひきつった。目はもう私を見ていなかった。扉の方をぎろりと睨み、その奥の…出ていった男を捉えていた。悪魔のような形相で、歯をくいしばって、軋む音が鳴るほど。

「あ、」

名前を呼ぼうとした、けど聞かず、彼は乱暴に扉を開けて、出て行って

しまった。…口が開いたまま、昔の記憶がぼんやり返ってくる。少し軋むあのベッドで、今いることは比べ物にもならないベッドで、毒に苦しむ私につきっきりで居てくれたのは、アーティーだけだった。彼は、彼だけは、損益無しで、いつも私の傍にいてくれた。今は？私のすることすべて、アーティーは認めない。あれ、今の私って…今の私を、彼は？そんな弱い考えが浮かんで、慌てて首を振って誤魔化して、あと少しだけ泣いた。

…それから数日も経たずに将軍は死んだ。間違いない。アーティーがやった。けれど、彼を糾弾する事がどうしても出来なくて、こうやって私は今裁判に招かれた。私に、あの絶対的な力はもう無い。将軍がいない私には虚勢しか無い。けれど、弱みを見せれば食い殺されてしまう。もう私には未来が見えていた。終わりが見えていた。ただ、意味のない先延ばしをしていた。

「ああ、そう言えば陛下？こんな噂があるのです…あくまで噂ですよ？将軍と陛下はあらぬ仲にあったとか、ないとか」

エリオット。これは昔から嫌いだった。教会は出しゃばって癩だが、救世主だとかなんだとか祀り上げられているこれを、私は教会なんかよりももっともって嫌い。まずその胡散臭い笑顔が嫌い。力を持たなかった時から、立派なご身分のこれがやたらとちょっかいをかけてきて不快だった。

「お前、妾にそのような口をきいて…命知らずか、馬鹿か、どっち？」

「ええ？侮辱したつもりは無いのです、失礼いたしました。あ、これは世間話ですが、子犬ほど吠えて可愛らしいですよ、ね、陛下？」

本当に…殺した親族や貴族たちと違って、私が復讐すべき事も無いのに、こいつだけは嫌い。人間として嫌い。

「今は裁判中よ。それとも、もう帰っていい？妾は将軍の死にはいっさい関わっていない。真実はそれだけ」

「お待ちください陛下。こちらには証拠がございます」

振り向くと、新しく将軍の地についた、生真面目そうな男が私をじとり

と見ていた。男の後ろから、怯えながら出てきた侍女。最近入った新顔の女だった。

「お前！あることないこと妾について吹き込みおったな！この恥知らず！」

ひっ、と女が青ざめたのを、将軍が手を伸ばし庇った。扇子で口元を隠し、齒嚙みする。もう、もう終わりか。

侍女が涙ながらに実情を訴え、皆がざわめく。みんなみんなみんな私の敵。視線や声、隠しきれていない笑みに包まれて鳥肌が立つ。悲劇のヒロインは家族を人質に取られていること、私の醜悪さ、将軍との関係、彼との関係を億劫に思っていた、と言うこと、震えながら話した。全て真実なだけに都合が悪い。私の身の周りの者は、全て信用できないから、彼らの家族を掌握していた。…でも殺したのは、私じゃない。アーティーで…でも、彼を排除したとして、そしたら私ほんとうに一人ぼっちになってしまう。それで、力も無いのにこの城で闘いながら生きるの？そんなの、出来ない。せめて気品は保とうと背筋だけ伸ばして、だけれど、頭はぼうっとしていた。こんな最後の際に、私にとって彼が…たったひとりの友人だったなんて気づいて。でも、アーティーは私に失望してしまった。もう、ぜんぶ遅いけれど。

部屋の外には兵、ベッドの上でひとり。私を置いてけぼりにして、教会や国軍、貴族や魔術協会が話し合っているんだろう。…処刑。それほどの罪ではない、そう思いながらも駄目だった。一度考え始めると震えが止まらなくて、手足が冷えていく。

「リーチェ」

「アーティー?!」

堪えていた涙があふれる。優しい声だった。昔聞いていた優しい声。扉が開き涙が引っ込んでしまった。隣にあの大嫌いなエリオットがいる。慌てて涙を拭き、背筋を伸ばす。アーティーとエリオット、接点はあっただろうか。魔術協会と協会は仲が悪かったと記憶しているけれど。

「救世主かなんだか知らないけれど、無礼よ。お前を部屋に入れること、

許した覚えは無いわ」

手厳しい、とエリオットは笑った。

「しかしね、陛下…おっと、ベアトリーチェ？許す許さない、そんな権限を貴女はもうお持ちでない」

「なに…言ってる、の」

ジリ、ジリと寄ってくるふたりに、思わず後ずさる。アーティーがフードを外して真っ白な肌を晒し、ニッコリと犬歯を剥き出し笑った。

「良かったね、リーチェ。やっぱり君には女王の座は毒だよ」

外に居るはずの兵に助けを呼んでも、もうだれも、なにも、私の声に答えてはくれなかった。

「触るな！無礼者！いくら貴方でも不敬だわ、わかっているの！？」

「ええ、そうですね」

幼児に相槌を打つよう適当に流されながら、ベッドの上で羽交い締めにされる。ゆったりした法衣、普段の笑顔から想像もつかないほど力が強い。上半身はもう動かせない。もう行儀が悪くても、必死に足を蹴り上げる。

「リーチェ、怪我するよ？ほら、葉を打つから、ね」

「嘘つき嘘つき嘘つきッ！ずっと私の味方だって言ったのにつアーティーは、アーティーだけは私っ」

…味方だと信じてた。だから、どこまでも付いてきてくれると思ったのに。彼が手にする鋭利な注射器を見て、がくがくと震える。もう涙は抑えられない。彼を見ると駄目だ。こういう時こそ強く見せなければいけないのに。

「うん…？僕はずっときみの味方だよ…？」

嘘つき…震えを隠そうと睨んだのに全然効いていなくて、二の腕にぷち、きゅうう、と液が入っていった。

「…、？あ…、？」

急に力が抜け、不本意にもエリオットに身を預けてしまう。上からくすくすと性格の悪さが隠しきれていない声が聞こえた。頭だけ冷たく冴えて

いて、体は嘘みたいに動かない。

「ごめんね、暴れると怪我しちゃうから。これから内臓を弄るんだもの」
「…ひ…ッ、あ…」

どうして？どうしてどうして？いつからアーティーは私を殺したがって
いたんだろう。それ程までに？私は彼に甘え過ぎていたのだろうか。彼が
心配してくれるうちは見捨てられないなんて、そう心の裏では思ってい
て、悪態をついたりしたから？

「ああ…泣いてしまった。アーティー、きみは言葉がいちいち足りない、
誤解を生みますよ。違います、ベアトリーチェ、ほーらよしよし」

涙が伝う頬を、柔らかな白いハンカチが拭った。

「う…っ、う…しゃ…あっ…！」

「うん？」

触るな気持ち悪い！そう言いたいのに口は重く、さらに顎を掴まれて無
理やり上を向かされ、のぞき込まれる。エリオットのとろりとした目にま
つげが影を落とし、内から光るような艶を持つ唇の隙間から、はぁ…♡と
吐息が漏れた。悔しいがこれの顔は認める。

「大丈夫、愛してあげるだけですからね」

「…え……」

なに、どういう意味なの。問いただしたいのに唇が震えるだけで、言う
ことを聞かない。人の良さそうないつもの笑みから、まったくすくすと気味
の悪い声が這い出た。

「リーチェ、誤解して欲しく無いんだけど、僕はべつに好んで君を共有し
ようと決めたわけじゃないよ」

「…、？あ…、？う…」

なに？全然わからない。何が言いたい。何がしたいの。動けないまま
視線すら抑圧されて、恐怖のあまり音を立てないよう、ふ、とひそめて息
を吐いた。

「僕は君が女王であるべきでないと前々から思っていた。君は力を手に入れ
てからおかしくなってしまったから…君をただ隠してしまえば良かった

んだけれど、一国の王女を拐って一生匿うなんて、一人ではできっこないからね。だからといって、君に敵意があるやつと組むのも嫌だし」

…隠す？拐う？何を言っているんだろう。左手の上をすべっとした手が這う。エリオットはまたくすくすと笑って、私の手を人形みたいに持ち上げた。

「わたしたち教会と彼属する魔術協会は仲が悪い。けれど、その反するふたつの機関が手を取れば、不満を各方面から受ける王ひとつ崩すなんて、造作もない。ということですよ」

「僕とこれは手を組んだ。全ては君のためだよ？これからずっと一緒にいようね、僕が守ってあげるから」

いやだ、何を言ってるの。こんなのおかしい。おかしい、絶対おかしい。がくがく震えながら涙をこぼす私にの唇に、アーティーが嘸みつき、血が流れた。

「ふ…うう…っ♡」

生まれたままの惨めな姿になった私を、彼らは服を着たままいいご身分でこねくり回した。両乳房をエリオットが、秘部をアーティーが。交尾など何回もしたことがあるけれど、こんな淫らな弄りをされたことは初めてで、恥ずかしくて、変な気持ちが出て、ただ子うさぎみたいに震えることしかできなかった。にち、にちゅう、と繊細な指使いが粘膜を擦っていく。胸の色のついたところを二本の指でさすったり、突起をくりゆくりゆされたり、ピンッと弾かれたり。アーティーの手は魔術具を扱うから少しカサついていて、平らな指先だ。エリオットの指は桜貝のような爪に白い陶器のようだ。こんなことをされているのに、思考は現実逃避をするかのように馬鹿なことを考えていた。

「あ、あ…う…」

「ベアトリーチェ…、♡」